

## 小学校外国語科における書く活動

### ～英語を使える楽しさにつなげるために～

及川 瑞希(22008)

#### 1. はじめに

2020年から小学校において3・4年生で外国語活動、5・6年生で外国語(英語)が教科となった。5・6年生においては、「書くこと」「読むこと」の2技能が新たに加わり、文字指導も行うこととなった。より一層英語へ慣れ親しませることが現在求められているのである。英語を初めて学習する小学校段階において、英語を学ぶことは楽しいということをまず実感させることは今後英語を学習していく子供たちにとって非常に重要なことと考える。その為、高学年で始まる「書くこと」も内容やタイミングを工夫し、子供たちが苦手意識をもたないようにする必要がある。

#### 2. 研究の目的

本研究の目的は、小学校の外国語(英語)における子供たちにとって楽しい英語の授業を検討することである。その中でも、書くことで英語を使える楽しさを見つけられる活動とは何かを実践し、研究していくものである。

研究テーマの副題にある「楽しさ」は、授業の中で、子供が外国語の学習に感じる面白さを指す。そして、最終的には子供たちの英語という言語への興味関心が高まっていくことを目指していく。<sup>1)</sup>

研究テーマの副題にある「使える楽しさ」とは、外国語の授業において目的・場面・状況を明確に設定し、ただ英語を学んで楽しいと感じるのではなく、実際に英語を使いコミュニケーションがとれて楽しいという楽しさの質を深めたことを指している。

また、私が本研究で主として扱っている書く活動(ライティング)は、小学校の高学年で行われる。小学5年生では、アルファベットの大きい文字・小さい文字を書くことができるようにすること、慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができることを目標としている。小学6年生では、小学5年生の学習を踏まえた上で、英文を書くことができるようにすることを目標としている。この書

く活動を小学校の外国語で主として行われている話すことと同様に、子供たちに必要感を持たせた上で行っていく。つまり、書く活動を生かして実際にやり取りを行い、より一層英語への興味関心を高めていくということである。この事を踏まえ、教科書に即した内容やタイミングで書く活動を行い、意味のあるやり取りができるような授業を目指し、英語を使える楽しさにつなげていく。

#### 3. 研究方法

子供たちにとって楽しい授業は何か、英語のどのようなどころに楽しさを感じているのか教育実習時の事前アンケート等をもとに調べる。そして、これらをもとに教科書内容で実践授業を行う。同時に英語を使える楽しさにつながるような書く活動を授業で行う。授業後は事後アンケートを取り、楽しさを感じたのかどうか調べる。本研究では、小学5・6年生それぞれで実践授業を行った。

#### 4. 研究成果

##### (1)6年生につながる書く活動

1年次では、「ライティングにおける5年生から6年生への接続」を副題として英文を書く土台づくりの研究を行ってきた。実習校で実施した実践授業の内容について報告する。対象学年は小学5年生で、単元は“Unit 5 Where is the post office?”(4/8時間目)である。この単元は“Where is the ~?”と質問して自分の行きたい場所を相手に尋ねること、“Go straight.”や“Turn right/left.”などの表現を用いて相手を目的地へ道案内することを目標とした単元である。実践授業では、道を尋ねる側・教える側の立場に交互になり、やり取りを行う。この活動の中に書く活動を効果的に取り入れることで、子供たちに楽しさを感じさせたいと考える。本時で使用した地図(表1)は、その後の書く活動の際に子供たちがワークシート(図1)へスムーズに書けるよう地図中に建物名(英語表

記)も併せて載せた。また、直前まで行っていた話す活動の内容を書く活動で行わせた。ワークシートには記入例も載せ、英文のどこに英単語を記入したらよいのか視覚的にも分かるようにした。

表1 指導過程

学習活動	指導上の留意点
教師のデモンストレーションを見る。	T <sub>1</sub> : Excuse me. I want to go to the junior high school. I am here now. Where is the junior high school? T <sub>2</sub> : Go straight for one block. Turn right and go straight for two blocks. You can see it on your left. T <sub>1</sub> : I see. Thank you. T <sub>2</sub> : You're welcome. →Tomoka wants to go to <u>the junior high school</u> . (下線部がワークシートへの記入部分)
自身の行きたい場所を選び、正しく書き写す。	地図の中から自分の行きたい場所を選ばせ、別紙のワークシートに書き写させる。(書く活動①)
道案内をする。 1)隣の人とペアになってやり取りをする。 2)教室内で出会った相手とやり取りをする。	やり取りを終えた毎にワークシートへ相手の名前と案内した建物名を記入させる。そのことにより、道案内のやり取りがしっかりできたことを子供たちに実感させる。(書く活動②)



図1 授業で使用した地図(左)・ワークシート(右)

この実践授業の事後アンケートの結果(表2)を報告する。このアンケートは、本時の授業を通し、子供たちが楽しいと感じたのか、書くことの意欲が高まったのかを調べるために実施したものである。この結果から、多くの子供たちが本時の授業に楽しさを感じ、英語を書きたいという気持ちが高まったことが明らかとなった。

表2 授業後アンケートの結果

	楽しかった/できた/思った	まあまあ楽しかった/まあまあできた/まあまあ思った	あまり楽しくなかった/あまりできなかった/あまり思わなかった	楽しくなかった/できなかった/思わなかった
1 今日の外国語の授業は楽しかったですか。	31人	3人	0人	0人
2 自分の行きたい場所を相手に伝えることができましたか。	27人	6人	1人	0人
3 相手の行きたい場所を英語で案内することはできましたか。	26人	7人	1人	0人
4 今日の授業を通し、もっと英語を書きたいと思いましたか。	24人	9人	1人	0人

(2)話す活動につながる書く活動

2年次では、対象学年を小学6年生として実践授

業を行った。最初の実践授業において子供たち 35人(うち2人は欠席)に対し外国語(英語)に関するアンケート調査を行った。このアンケートは私の授業実践を行う前の子供たちが英語に対しどのような意識を持っているのか調べるために行った。主に質問項目は英語のどんな所に楽しさを感じるのか、またどのように英語を書いている時に楽しさを感じるのかに特化したものである。結果は次の通りである。

表3 アンケート結果

	好き/感じる	まあまあ好き/まあまあ感じる	あまり好きではない/あまり感じない	好きではない/感じない
1 外国語の授業は好きですか。	13人	12人	5人	3人
2 アルファベットや英単語を書くことに楽しさを感じる。	16人	7人	6人	4人
3 英文を書くことに楽しさを感じる。	12人	9人	7人	5人
4 自分の書いた英語が他の活動に役立った時に楽しさを感じる。	12人	13人	6人	2人
5 自分の書いた英語を実際に発音できたときに楽しさを感じる。	9人	10人	10人	4人
6 自分の書いた英語を相手に伝える(話す・読むどちらも含む)ことができた時に楽しさを感じる。	12人	9人	7人	5人

このアンケート結果(表3)から、今回の学級には英語を好きだと感じている子供たちが多くいる一方で、あまり楽しさを感じない子供たちも一定数いることが分かった。その為、実践授業ではこのことを踏まえて行った。

実践授業で行った単元は“Unit 5 We all live on the Earth.”である。この単元は地球に暮らす生き物やそのつながりについて考え、“~ live in ~”, “~ eat ~”などの表現を用いて発表することを目標としている。その為、理科の食物連鎖の内容とも関わっている単元である。

今回の実践授業では、1単元(8時間扱い)全てで授業を行うことができた。単元の終わりにはまとめ活動として、子供たち一人一人に自分の調べた生き物について本単元の重要表現である“~ live in ~”や“~ eat ~”を使って発表させた。加えて、発表する生き物をこちらが予め提示した絶滅危惧種とし、この生き物を守るために自分たちに何ができるのか(環境保全)既に学習している can の表現も使い、併せて発表させた。この発表の際、子供たちが自信をもって発表できるよう発表原稿を作成させた。実際にこの単元の前に学習していた“Unit 3 Let's go to Italy.”でも自分の調べた国について英語で発表する場面があ

った。その際、作成した発表原稿を見て発表する子供たちが多くいた。その為、本単元においても発表原稿を作成させて発表に臨ませたいと思った。そして、発表原稿の作成に当たり、新出表現に慣れ親しませるため、話す活動同様に書く活動も継続的に行える取り組みも行った。詳しい単元計画は以下の通りである(表4)。

表4 単元計画

時	学習活動	指導上の留意点
1	・事前アンケートの実施 ・生き物の名前発音の確認 ・生き物が生きやすい環境にするために、自分に何が出来るか考える	・第8時の発表会の際、今回確認する生き物の名前(絶滅危惧種)について話すので第1時から継続的に練習させる。
2 3 4	・“~ live in ~”の表現に慣れさせる。 ・Let's Singを行う ・Let's Chantを行う ・ビンゴゲームを行う ・Let's Read and Write①・②を行う ・Let's Listen①・②を行う ・Let's Try②を行う ・Let's Read and Write③を行う	・“~ live in ~”の表現に慣れさせるため、ビンゴゲームで“What do ~ live?”, “~ live in ~”のやり取りを繰り返し行わせる。そして、ビンゴゲームでやり取りした内容をワークシートに英語で記入させる。ワークシートは前半を穴埋め式にし、後半は英文で書き写しをさせる。“~ live in ~”も第8時の発表内容の1つのため、今後も繰り返し練習させていく。
5	・“~ eat ~”の表現に慣れさせる。 ・Let's Listen①・②を行う ・Let's Try③を行う ・Let's Read and Write④を行う	・第8時の発表に向けて“~ eat ~”の表現を学習させる。“What do ~ eat?”, “~ eat ~”のやり取りを行わせ、本時の表現に慣れさせていく。その際、前時まで学習してきた“~ live in ~”の表現もやり取りの内容に加える。そして、このやり取りの内容をワークシートへ英語で書かせる。ワークシートは前半を穴埋め式にし、後半は英文で書き写しをさせる。
6 7	<発表準備> ・発表内容と方法の確認 ・発表例を見る ・下書き(発表原稿・ポスター)を作成する ・本書きをする ・発表練習をする	・発表内容 1 I introduce ~. 2 ~ live in ~. 3 ~ eat ~. 4 ~ are ~. 5 We can ~. ・発表方法 5~6人のグループを作り、1人が作成したポスターを持って発表を行い、もう1人がクロームブックでその様子を録画する。録画させるのは発表者がどんなことを話していたのか、相手に伝わるようどんな話し方をしていたのか改め確認させるためである。それ以外の人たちは発表を聞く。
8	・発表練習をする ・発表を行う ・録画を見て、友達が話していた内容をワークシートへ記入する	・録画を見る時、発表者がどんな話し方の工夫をしていたかも記入させ、それをもとにその良さを共有していく。

また、今回の実践授業で行った主な書く活動は、5年生の道案内の授業と同様主にワークシートで実施した。使用したワークシートは次の通りである。

図2 授業で使用したワークシート(2年次)

上記2つのワークシート(図2)は、書く活動へ入る前に、予め話す活動において同様の表現に慣れ親しませてから行った。そして、スモールステップを心掛け、すぐ1文を書させるのではなく、単語で書き写せるよう最初は穴埋め式にし、徐々に英文を書かせていった。全体を通して無記入の子供はいなかった。もちろんワークシートを細かく見ると単語の写し間違えや大文字・小文字の間違い等のエラーはあったが、前段階で行った話す活動で得た情報をもとに子供たち全員が英文を書くことはできていた。また、単元末で行った発表で使用した発表用紙は次の通りである。

図3 発表用紙

発表時は、上記の発表用紙の表面(図3左)を相手に見せ、発表者は裏面(図3右)を見て発表できる仕様にした。表面は自分が紹介する生き物や食物連鎖のイラストを描き、裏面には事前に子供たちがそれぞれ考えた紹介文を書かせた。子供によって英文のみを書いていたり、分からない英単語には読み仮名をふるなど自分が発表しやすいよう工夫をしていた。

また、授業毎にとっていたアンケート結果について報告する。「今日の授業は楽しかったですか。」という質問項目の結果のみ次に示す。

表5 授業後アンケートの結果(1 単元分)

時数	1 (楽しかった)	2 (まあまあ楽しかった)	3 (あまり楽しくなかった)	4 (楽しくなかった)
2/8	18人	11人	0人	1人
3/8	24人	6人	0人	1人
4/8	22人	7人	1人	1人
5/8	20人	12人	0人	0人
6/8	28人	6人	0人	0人
7/8	26人	6人	0人	0人
8/8	24人	5人	3人	0人

1 時間目は授業の大半を事前アンケート調査に使用したため、今回は省略した。アンケート結果(表5)から多くの子供たちは1単元を通して授業に楽しさを感じたことが分かった。特に4時間目以降は書く活動も始まったが、多くの子供たちは楽しさを継続的に感じて授業に取り組んでいたことが結果から読み取れた。

## 5. 考察

2年間の研究を通し、書く活動を積極的に取り入れても子供の英語に対する楽しさは損なわれないことが分かった。しかし、書く活動を取り入れる際は、対象学年・子供の実態を踏まえて、書かせる内容や量を吟味する必要がある。本研究で実践授業を行った子供たちの実態は、学習塾に通い既に小学生内容を学習している子供や外国籍の子供もいた。加えて、子供たちの実態から普通の授業においても実習校の専科の先生が来年の中学校を見据えて取り組んでいる様子も授業観察から見られた。その為、これらを踏まえて本研究においては小学生段階ではあるが、英語を書かせる量を多めに設定した。

また、本研究において私は副題にある「英語を使える楽しさ」につながるよう話す活動と書く活動の関連性を意識した。2年間で継続して行ってきたのは、直前までアクティビティーで話していた内容を改めて英文で書かせるという書く活動である。そうすることで、書くことのハードルが下がるのではないかと考えたからである。また、6年生の実践授業では単元末の発表において活用できるよう発表原稿を作成させた。発表後のアンケート調査において、「自信をもって今日発表することができましたか。」という質問に対し、(まあまあ)できたと答えた子供は28人、「今日の発表の時、事前に作った発表原稿は役

に立ちましたか。」という質問に対し、(まあまあ)役に立ったと答えた子供は29人いた。これらの結果から、書く活動が話す活動に役立ったことが明らかとなった。そして、同様のアンケート調査における「Unit 5を通して行った書く活動は楽しかったですか。」という質問項目に対し、(まあまあ)楽しかったと答えた子供は30人、「Unit 5の学習を通し、英語を書いてみたいという気持ちは高まりましたか。」という質問項目に対し、(まあまあ)高まったと答えた子供は25人だった。その為、書く活動がその後の話す活動に役立つと子供たちの書く活動の楽しさを高めることができるのではないかと考えた。そして、あくまで小学校段階の「書くこと」であるため、英単語・英文の正しい書き方は意識させたが、スペルミス等細かな文法的間違いについては個別に強く指摘することはしなかった。これは、子供たちの今後の英語教育を見据えた時、英語の「書くこと」に対する苦手意識を小学校段階でもたせないためにも必要と考える。<sup>2)</sup>

## 6. 今後の課題

研究成果から、多くの子供たちが授業に楽しさを感じた一方で、(あまり)楽しくないと感じている子供も一定数いた。授業観察・実践授業を通し、英語を書くことに難しさを感じている子供や英文を書いたが、その後実際に読もうとすると難しさを感じる子供など、子供によって様々な難しさを感じている様子が見られた。子供たち全員が英語に楽しさを感じられるよう、より個々に子供を観て個別対応することの必要性が見つけられたので、今後に生かしていきたいと思う。

### 引用・参考文献

- 1) 櫻井 千佳子:「フェイス」の概念の小学校英語教育への援用:英語学習意欲促進要因の分析、『武蔵野教育學論集第2号』, 77-90(2017年).
- 2) 藤城 妙子:小学校英語教育における「書くこと」の指導の工夫、『山梨大学教育人間科学部紀要』, 378-385, (2015年).

<https://www.edu.yamanashi.ac.jp/wp-content/uploads/2019/12/b79c873c77a0372ededd9c2286e7e4bd.pdf>

(2024年2月2日現在)

## 小学校外国語科における書く活動 ～英語を使える楽しさにつなげるために～

及川 瑞希(22008)

2020年から小学校5・6年生において英語は教科となった。その為、小学校3・4年生の段階にはない「書くこと」と「読むこと」の領域も追加された。話す活動が特に中心となっている小学校において、どのような内容やタイミングで書く活動を行えば子供にとって楽しい英語の授業となるのかを実践授業を通じて本研究で見取った。

アルファベット・英単語の書き取りが中心である5年生段階では、6年生で始まる英文を書くことを意識した書く活動を道案内の授業で行った。6年生段階では、5年生段階で得た結果をもとに英語を使える楽しさにつながる書く活動を子供たちが生き物について紹介する単元で行った。英語の「書くこと」に対し子供たちが苦手意識をもたないよう実践授業においてはスモールステップを心掛け、教材を工夫し活動を行ってきた。また、「話すこと」と「書くこと」に関連性をもたせ、書く活動のハードルを下げた授業も行ってきた。(391字)

キーワード:英語, 書くこと, 楽しさ,

ユニット指導教員(◎ユニット長, ○副ユニット長)

◎深澤祐司, 鈴木渉, 吉村敏之, 本田伊克, 齊藤千映美, 戸塚将, 越中康治, 仲谷健太郎